

I 本校の JSL カリキュラムの実践について

【平成 21 年度の取組】

指導体制作り

【校内体制】

- ・ 在籍学級の担任との連携 → 円滑な教科指導をするための連絡調整
- ・ 時間割をそろえ、在籍学級の進度に合わせた指導(あるいは先行指導)
- ・ 指導内容の精選 (担任・教科主任との連携)

【日本語サポーターとの連携】

- ・ 教科の補充のための資料作り ⇒ 単元ごとのプリント作り
- ・ 教科支援のため、教科書・ドリル・プリント類の「ルビふり」の実施
- ・ 児童の躰きを把握し指導に生かせるよう個人カルテを作成し分析した

教育実践

- ・ 3 学年の算数科 「円と球」「長さ～道のりときより～※」「水のかさ」「箱の形」「重さ」
- ・ 6 学年の算数科 「単位量あたりの大きさ」「比※」「拡大図と縮図」「比例」
国語科 「漢字字典を利用しよう」「依頼の手紙を書こう」
「ヒロシマのうた※」

※は授業公開

日本語指導関係研修への参加

- ・ 平成 21 年度 外国人児童生徒等に対する日本語指導指導者養成研修会参加
- ・ 東京学芸大学 JSL 研究会参加
- ・ 先進地区視察
愛知県岩倉市立岩倉東小学校・南部中学校・曾野小学校(岩倉市適応指導教室)
三重県松阪市初期適応支援教室「いっぼ」 三重県四日市市立笹川西小学校・中学校
京都府京都市立池田小学校(JSL 研究校) 東京都武蔵村山市立第四小学校

II 算数科における指導事例

【第 6 学年の実践】

- ・ 6 年児童 2 名の抽出指導を行った。(算数科 国語科 全取り)
- ・ 6 学年の国語の時間と算数の時間割をそろえて取り出し指導に当たった。
- ・ 教科指導及び補充指導は JSL カリキュラムを意識した指導を行ってきた。特に導入には体験的な活動を意識して取り入れて指導に当たった。
- ・ 在籍学級の学習進度に合わせてたり、先行指導したりした。評価は学級で行った。
- ・ 内容を精選し、理解に時間がかかる単元に多く時間をかけた。
- ・ 指導の中で、算数特有の学習言語を重点的に指導した。特に新出語彙や苦手な漢字を事前に指導してから単元に入った。(日本語サポーター作成資料)
- ・ 文章題の言い回しに着目させ、何を求められているのかを捉えさせる訓練を積んだ。質問されていることやキーワードに下線を引かせたり、単位に○をつけて意識づけさせたりした。

1 学習指導の実際

(1)学習指導要領での指導学年と領域 第6学年 算数科 数量関係				
(2)単元名 「比」 5時間 ～比の意味と表し方(1/5)～				
(3)対象児童の実態				
	出身国・母語	在日期間	日本語習得状況	算数に関する関心・意欲・態度
M 女兒	ブラジル籍 ポルトガル語	来日 3年目	日常会話は片言であるが、短い文節で話すことができるようになってきた。学習言語の理解できるよう支援が必要である。	「割合」の学習を理解している。算数特有の語句や言い回しなど、教科固有の言語の理解への支援が必要である。授業で理解したり、知ったりしたことを自分の言葉で表現することが苦手である。
T 男児	ブラジル籍 日本語	日本生まれ 日本育ち	日常会話は支障ない。学習言語には支援が必要。	意欲的に学習しているが、スローペース。課題が終わらないことも多い。計算問題は得意だが、文章問題の読み取りが困難。教科固有の言語の理解への支援が必要である。
(4)単元構想	<p>6年生2名の児童を対象に指導する。取り出し授業で通常学級から通級している児童である。男児の日本語能力は日常生活では不自由は無く、簡単な文章問題も進んで解くことができる。しかし、算数特有の語句や言い回しなどで躓くことが多く、算数の理解不十分の要因となっている。また、女兒の日本語の能力は教師の指示や簡単な日本語表現は理解できるが、自分の考えや思いを、日本語を使って表現することができない。2人とも家庭内の言語環境が影響していると思われたので、教科指導の中で、発言や質問の「話型」をつくり、「話型」を常に意識させ指導を続けてきた。</p> <p>本単元では、「比」という言葉の意味を理解させ、二つの数の組み合わせで表す「比の表し方」について学習する。「比」の表記は全く新出のものであり、児童においてはなじみのない学習内容といえる。「比」は日常生活のいろいろな場面で用いられるだけでなく、基準量を任意で決めることができることから、「○対○」のような二量の数値をそのまま表示でき、二つの数量関係を簡単に整数で表せる良さがある。実生活の中でも使えるように身につけさせたい。また、感じたことや考えたことを言葉にして表現することが苦手な児童の実態をふまえ、ジュースを作るという活動を2時間扱いで実施し、児童の興味関心を持続させながら、「比」の意味を、体験を通して捉えさせたい。</p> <p>特に体験活動では、次単元で学習する「比例」や「倍と割合」への発展性を考慮し、児童の身近な飲み物である「カルピス」を使って学習を展開し、「カルピス原液」と「水」の割合を考える具体的な操作活動を十分に取り入れることで、児童の学習意欲の喚起持続と理解の向上をさせたい。</p> <p>日本語指導の観点からは、「～は～とといいます。」(AU:F-6 命名する①)「～はこのように書きます。」(F-8 命名する③)のようなAU(話型)を意識した表現で発話し、確実に意味をつかませる。また、「原液」「濃さ」という言葉や「○対○」という新しい表現が多く使われるのであわせて押さえていきたい。</p>			
(4)指導方針	<ul style="list-style-type: none"> ・導入においては、児童に身近な「カルピス」を使った学習を進め、「カルピス」の割合を考える具体的な操作活動を取り入れることで、「比」の表し方を理解させる。 ・課題解決の場面では、児童が生活の中で経験したことや既習の知識などを振り返らせる時間を確保し、課題を論理的に考えたり、発展的に考えたりできるような課題設定を心掛ける。また、図・具体物・ヒントカードを有効に活用し、児童が自己の考えを持ったり、考えをわかりやすくまとめたり出来るようにする。そして、取り出し指導をしている2名の学習者が互いの考えを出し合い、十分に交流し合うことで、課題解決できるように支援していく。 ・「比」を活用する場面が、算数の時間だけにとどまることなく、図工や家庭科の教科や総合的な学習における学習活動にも生かしていけるよう、算数と他教科のかかわりについても考えていきたい。児童が主体的な学習活動を進めていくことができるよう次のことに配慮した。 <ul style="list-style-type: none"> ・在籍学級の担任と連絡を密にし、在籍学級と日本語教室での学習の様子について情報交換をし、学習指導に生かす。 ・発問はAUを意識した分かりやすい文章で表現し、ゆっくり発話する。 ・実感を伴う体験活動となるよう、具体物を多く使う活動を取り入れる。 ・練習問題を行うときは、児童の興味関心を持続させるような方法(ゲーム的な要素を含む発問や身近な話題からの発問などの工夫)を考え、楽しく取り組めるようにする。 			

(5)目標	<p>【教科指導の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・比の意味や表し方について理解する。〔D(1)〕 ・比の相等について理解し、比の性質を活用して問題を解くことができる。〔D(1)〕 <p>【日本語指導の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「○対○」という比の表し方を知り、その表現・表記に慣れる。 ・「○人分」「比」の言葉の意味を理解させる。
-------	--

2 学習活動

ねらい・学習活動	指導上の留意点 支援(●AU ○教科)	主な ●AU ・教材	効果的だった指導法
<p>1 問題文を読み、題意を把握する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カレンさんはカルピス原液 2 カップと水 8 カップでカルピスジュースを作った。 ・原液を 3 カップに増やしてカレンさんと同じ味(濃さ)のカルピスを作ろうとしている。 	<p>○場面から読み取れることを整理させる。1 カップが 100ml で、原液 200 ml、水 800 ml を混ぜたことにも着目させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●問題文を提示し、題意を確実につかませる。 ●カルピスを飲んだ経験があれば、加える水の量で味が変わることを想起させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示用問題文 ・カルピスの原液 ・水 ・プラスチックの透明なコップ 	<p>【具体物の操作・実体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実体験としての理解を促せた。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> カレンさんがカルピス 2 カップと水 8 カップでカルピスジュースを作りました。原液 3 カップに増やしてカレンさんと同じ濃さのジュースにするには水を何カップ用意すればよいでしょうか？ </div>			
	<ul style="list-style-type: none"> ●「原液」「濃さ」の意味を知らせる。 ●問題文を丁寧に読ませ、分かっていることや尋ねられていることを確かめさせる。 	<p>A-6 経験を確認する② 「～をしたことがありますか?」</p>	
<p>2 量を変えて、同じ味(濃さ)を作る方法を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> 原液を 3 カップに増やして、カレンさんと同じ味(濃さ)のジュースを作る方法を考えましょう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・水をどれだけ量にすればよいか考え、理由を説明する。 ・カレンさんのカルピスと同じ味になる作り方について話し合う。 	<p>○同じ味(濃さ)の作り方をできるだけ自力で考えさせたい。</p> <p>○見通しの立てられない児童にはプリントのペドロとマリアの考え方を基にして話し合わせてもよい。</p>	<p>○ペドロとマリアのプリント</p> <p>F-6.7 命名する①② 「原液」「濃さ」</p> <p>D-3 操作する③ 「～を使って考えましょう。」</p> <p>K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」</p>	<p>【具体物の操作・実体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実体験としての理解を促せた。 <p>【例題の提示】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見通しの立てられない児童には別の例題を提示することによって、別な視点を持たせることができた。
<p>3 比の意味とあらわし方を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カレンさんが作ったカルピス原液と水の割合を、原液を 2 として表す。 ・「比」の意味と表し方を知る。 ・ペドロとマリアのカルピス原液と水の量の割合を比で表す。 	<p>○原液を 2、水 8 と表す意味を割合としてとらえられない子どもには、200ml を 2 とみたときに、800ml はどれだけとみられるか考えさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 100px; text-align: center;"> $2 : 8$ </div>	<p>F-8 命名する③ 「これは、こう書きます」</p> <p>○単位の掲示物</p> <p>H-2 条件的に考える② 「～だったら、～はどうですか?」</p>	
<p>4 「等しい比」について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3 カップでカルピスを作り、味見をして同じ濃さになっているか確認する。 ・カルピス原液と水の量の割合がカレンと同じなのは、ペドロとマリアのどちらであるか考える。 	<p>○具体的な操作で「等しい比」の意味をとらえさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●味見した感じを、自分の言葉で表現させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・「同じ濃さです。」「同じ味です。」 ・3:12 はカレンさんのカルピス 2:8 と「等しい比」といえる。 ●「等しい」と「同じ」という表現に気をつける。 	<p>D-3 操作する③ 「練習しましょう。」</p> <p>K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」</p>	<p>【具体物の操作・実体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に味見をすることで、量が違っても濃さが同じであることを体感することができた。
<p>5 学習のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●児童の言葉でまとめさせる。 ●新出語彙を確認する。 	<p>K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」</p>	

3 本授業における成果と課題

本授業は、「体感」を意識したので、児童は大変興味を持ち主体的に学習に取り組むとともに「比」に対する理解が深まっている。また、本単元の後に「比例」があるが、本単元をしっかりと学ぶことでスムーズに「比例」の学習に入っていた。さらに、2月に中学校教員が本校の交換授業「算数科 比例」を在籍学級で行ったが、その際、日本語指導教員も入り込み、M児の傍に付いた。初めての教員の指示も聞き取れていたようで、日本語指導教員はワークシートのルビふりの支援のみだった。M児は授業の内容を理解し、適切な解答を記述することができていた。この様なことから、次単元等への発展性のある内容を具体操作など「体感」を意識した教育活動を取り入れることは、学習内容の理解をより深めることにつながり、効果的であったと考える。イメージしやすい授業が展開されていた。

今回は、「比例」の授業を意識した単元指導計画を立て学習指導したが、全ての単元を行うことはなかなか難しい。児童が躓きそうな単元を選んだり、中学の数学に直接つながるような内容に絞ったりし、JSL授業を行っていくことが課題である。

4 児童の変容(JSLカリキュラムを意識した指導を実践してきた)

M 女児	日本語能力	算数	国語	他教科
6 学年 4 月当初	単語での会話を中心。聞くことはできるが、答える事は苦手。友だちとの会話も友だちの問いかけに頷くことでコミュニケーションをとっている。	かけ算九九はポルトガル語で半分、日本語で半分。完璧にはおぼえてはいない。4年生までの算数は学習していない。	漢字の能力は2年生レベル。分かち書きの文章は読めるが、当該学年の教科書は読めない。	国語算数以外では、理科は比較的内容理解しているが、社会科はほとんど学習についていけない。
現在 (2010-02)	受け答えができるようになり、教室の友だちとの会話も増え、特定の友だちと過ごしている。	6 学年の算数を理解し、在籍学級の進度についていている。在籍学級で行われるテストの平均点は7割を超え、100点も取れるようになってきた。	6 学年の教科書は物語文と説明文に焦点を絞り指導。内容理解及び漢字の読みを中心に学習を進めてきた。在籍学級の市販のテストを全て実施している。	担任の専門教科が社会科なので、社会に大変興味を持ち始めている。時間があるときに社会科の指導も行っている。理科に関しては補充を行い実験や観察の結果を確認することになっている。

T 男児	日本語能力	算数	国語	他教科
6 学年 4 月当初 (日本生まれ日本育ちブラジル籍)	日常会話に支障なし。比較的難しい言葉をつかって会話をする事ができる。	文章問題を読み取る事ができず、学習用語も定着していない。算数は得意な教科であるが、分数や小数になると思考が停止してしまう。	漢字の書き取りは2年生程度。読みは3年生程度。音読に関しては、分かち書きしていないとスムーズに読む事ができない。	特に理科の実験には大変興味をもって学習している。歴史的人物の名前が覚えられず、漢字が多用される社会科には苦手意識をもっている。
現在 (2010-02)	同上	文章問題に出てくる、キーワードに着目できるようになり、自力で問題を解こうとする姿が見られてきた。	国語辞書で語句を引く習慣が付き、読めない漢字や意味の分からない言葉などを自主的に調べてくるようになった。	社会科では歴史上の人物に興味を持つようになり、歴史マンガを読むようになった。

【第3学年の実践】

- ・3年児童4名の抽出指導を行った。（算数科 全取り）
- ・3学年の外国人児童の全てを取り出し→3クラス算数の時間割をそろえた。
- ・在籍学級と進度を同じくし、評価は学級で行った。
- ・内容を精選し、理解にかかると多く時間をかけた。
- ・指導の中で、算数特有の語句や言い回しを重点的に指導した。特に新出語彙や苦手な漢字を事前に指導してから単元に入った。
- ・文章題の言い回しに着目させ、何を求められているのかを捉えさせる訓練を積んだ。質問されていることやキーワードに下線を引かせたり、単元に○をつけて意識づけさせたりした。

1 学習指導の実際

(1)学習指導要領での指導学年と領域 第3学年 算数科 量と測定				
(2)単元名 「長さ」 4時間 ～道のりときより (2/4)～				
(3)対象児童の実態	出身国・母語	在日期間	日本語習得状況	算数に関する関心・意欲・態度
A 女兒	日本・ブラジル ポルトガル語	3年	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。	教科固有の言語の理解が不十分。1学年の算数が未履修。
B 女兒	ブラジル ポルトガル語	6年	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。	算数特有言語の理解が不十分。計算は得意。文章問題が苦手。言葉が違えば同じ意味でも分からなくなってしまう。
C 男児	ブラジル ポルトガル語	6年	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。	算数に関心を持ち、意欲的。計算も得意。発問の表現が違っても理解する事ができる。
D 男児	ペルー スペイン語	5年	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。	意欲的に学習しているが、スローペース。課題が終わらないことも多い。繰り返し上がり、繰り返しの計算が苦手。
(4)単元構想	<p>3年生4名の児童を対象に指導する。取り出し授業で通常学級から通級している児童である。4人の日本語能力は日常生活では不自由は無く、簡単な文章問題も進んで解くことができる。しかし、算数特有の語句や言い回しなどで躓くことも多く、他の日本人の児童と同じ時数では理解不十分な子ども達である。</p> <p>本単元では、「道のり」と「きより」の言葉の違いを理解させ、新しい単位である「km」を導入する。本校の指導計画では「道のり」と「距離」については1時間扱いになっているが、児童の実態をふまえ、両語の違いをはっきり区別させるために、「道のり」1時間、「きより」1時間の2時間扱いにした。</p> <p>日本語の観点からは、「～は～といいます。」(AU:F-6 命名する①)「～はこのように書きます。」(F-8 命名する③)のようなAUを意識した表現で発話し、確実に意味をつかませる。また、「～から、～まで」という表現が多く使われるのであわせて押さえていきたい。</p>			
(5)指導方針	<p>児童が生き生きと学習活動を進めていくことができるよう次のことに配慮した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在籍学級の担任と連絡を密にし、学習の様子について情報交換をし、指導に生かす。 ・発問はAUを意識した分かりやすい文章で表現し、ゆっくり発話する。 ・道のりの計算をする際は、地図や半具体物を使う活動を取り入れる。 ・練習問題を行うときは、児童の興味関心を持続させるような方法を考え、楽しく取り組めるようにする。 			
(6)目標	<p>【教科指導の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「道のり」の意味、求め方を理解し、長さの単位「km」について知る。 <p>【日本語指導の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「道のり」の意味を理解させる。 ・「～から～までの道のり」「～が歩く道のりは何mでしょう。」など文章問題に使われている表現を理解する。 			

2 学習活動

ねらい・学習活動	指導上の留意点 支援(●AU ○教科)	主な ●AU ・教材	効果的だった指導法
1 問題場面に出会う ・動物園案内図を見て気付いたことを話す。	○拡大した案内図を元に、動物園の案内図に興味を持たせ、いろいろな道があることを知らせる。 ●問題文を提示し、題意を確実につかませる。	○動物園案内拡大図 児童用・掲示用	【図の拡大】 ・興味関心を引く。 ・分かりやすい説明のために提示資料として活用した。
5 問題を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">正門から、リスの森を通過して、キリンの前まで歩く道のりは何mありますか？</div> ・みきの話から歩く道のりを考える。 正門から 800m キリンまで 500m 800+500 で 1300mだ 3 1km と m の関係について知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">1km = 1000m</div> ・1300mの長さを想像する。 ・みきが歩く道のりをkmを用いて表す。 4 kmを用いる練習をする。 ・展望台から、くじゃくを通過してライオンまでの道のりを考える。 ・単位の変換	●「道のり」の意味を知らせる。 ●問題文を丁寧に読ませ、分かっていることや尋ねられている事を確かめさせる。 ●1000mを「1キロメートル」といい、1kmと書く事を知らせる。 ○長さの単位が分かる。 ○時間があれば、何通りかの計算をさせる。 ・場所を書いたカードを引かせ、自分の道のりを考えるゲームを行う。	○「道のり」 F-6.7 命名する①② D-3 操作する③ 「～を使って考えよう。」 K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」 F-8 命名する③ 「1000m」を「1キロメートル」といい、「1km」と書きます。 ○単位の掲示物 D-3 操作する③ 「練習しましょう。」 K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」	【児童用の拡大図】 ・児童が話し合いをする際に使用。拡大地図の道を指で指し示しながら、互いの意見を出し合えた。 【個別ワークシート】 ・実態に合わせ個別のワークシートを準備した。 ⇒もっと細かいステップで作文できるようなワークシートが良かった。
5 学習のまとめ ・本時の内容を確認する。	●子供の言葉でまとめさせる。 ●新出語彙を確認する。	K-5 分かったことを表現する① 「分かった事を言ってください。」	【話型】 モデルとなる話し方を提示し指導した。

3 本授業における成果と課題

本授業は、市外の日本語指導研究会の先生方が本教室に研修に来た時に公開授業したものである。比較的、言葉を流暢に話せる子ども達だったため、算数特有の語彙や言い回しを意識しなくてもスムーズに授業を進めることができた。新出単位はしっかり理解することができた。また、動物園案内拡大図を児童用に準備したことは、児童が話し合いをする際に拡大地図の道を指で指し示しながら、互いの意見を出し合えたのでとても有効だった。しかし、学習活動4の問題作りでは、文章力のある子と無い子の差が大きく、頭の中で問題は作れているのに、文の表現方法が分からなかったり、相手に問題の意味が伝わらない文章になってしまったりしていた。個別のワークシートは準備したが、もっと細かいステップで作文できるような(穴埋め文・文のモデル)ワークシートを準備すべきだった。「言葉」で躓く児童、「考え方」で躓く児童、4人がそれぞれ苦手とするところが違うので、支援の仕方も多様になる。4人のレベルの差を埋めるため、また、能力の高い児童にレベルの高いワークシートを準備するなど、個々の実態に合わせた工夫が必要であると感じた。

4 児童の変容(JSL カリキュラムを意識した指導を実践してきた)

A 女児 日本・ブラジル・ポルトガル語			
	日本語能力	算数	他教科
3 学年 4 月当初	近隣のブラジル人学校に 1 年生まで在籍していた。ポルトガル語も日本語も不自由なく話すことができる。	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。また、1 学年の算数を履修していないため、10 の概念があいまいである。掛け算はポルトガル語で習得済み。	教科固有の言語の理解が不十分。日本の文化的な経験が浅く、社会科の学習が苦手である。1 学年の算数が未履修。
現 在 (2009-10) 11 月帰国	ブラジルに帰国	文章問題を苦手としていたが、文章をリライトしたり、キーワードに着目したりする活動を通して読み取る力が付いてきた。	社会科では、資料の読み取りを中心に補充してきたため、テストでは良い点を取れるようになってきた。

B 女児 ブラジル・ポルトガル語			
	日本語能力	算数	他教科
3 学年 4 月当初	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。新出語彙が定着するまで時間がかかる。発音が不明瞭。	算数特有言語の理解が不十分。計算は得意。文章問題が苦手。言葉が違うと同じ意味でも分からなくなってしまう。	図工が苦手。教師の指示が漠然としていてよくわからないという。具体的で明確に指示がないとスムーズに活動できない。
現 在 (2010-02)	自分について多くを語るようになってきた。算数の学習の考え方を説明する時など、理由を具体的に話すことができる。語彙力が向上したのか、表現語彙も豊かになってきた。	文章問題を苦手としていたが、文章をリライトしたり、キーワードに着目したりする活動を通して読み取る力が付いてきたと思われる。未だに新出語彙が定着するまで時間がかかる。	担任に B 児の特徴を理解してもらい、具体的で短い指示を出してもらうようにしたところ、スムーズに活動できるようになってきた。

C 男児 ブラジル・ポルトガル語			
	日本語能力	算数	他教科
3 学年 4 月当初	日常会話に支障はない。語彙も豊富で、日本人の友だちが多い。	算数に関心を持ち、意欲的。計算も得意。発問の表現が違っても理解する事ができる。反面、集中力が継続せず、ケアレスミスが多い。問題文を最後まで読んでから解くように指導している。	取り出しをしている児童の中では、一番能力が高いが、「わかっているつもり」と思われる行動が多い。話の聞き方のスキルを身につかせなくてはならない。
現 在 (2010-02)	同上	ケアレスミスが多かった文章問題をリライトしたり、キーワードに着目したりする活動を通してきたためか読み取る力が付いてきた。	話を聞くポイントを指導してきたためか、朝会の時の校長先生の話や担任の話もよく聞き取れるようになった。しかし、ケアレスミスは多くの教科で見られるので今後も指導継続が必要である。

D 男児 ペルー・スペイン語			
	日本語能力	算数	他教科
3 学年 4 月当初	日常会話には支障ないが、学習言語の理解が十分でない。	意欲的に学習しているが、スローペース。課題が終わらないことも多い。繰り上がり、繰り下がり計算が苦手。	宿題の漢字練習が滞りがちになり、日本語教室で国語の補充を行う。間違った読み方で練習してきたり、宿題を出さずにいたりするので、確認が必要である。
現 在 (2010-02)	同上	算数に使われる教科特有の言葉や言い回しに注目させながら指導を行ってきたためか、文章問題の正答率が上がった。相変わらずスローペースであるため、時間内に課題を終わらせるための指導が必要である。	算数指導を通して、国語や社会科の教科補充も行ってきた。自主的に学習を行うことがなかなか難しい。指示されたことではできるようになったので、今後も自主的に行動できるようになるための指導が必要である。

III 成果

【6年児童について】

5年生の後半から、児童がどのようなところに躓いて学習の理解が妨げられているかを洗い出し、まずは「内容理解」優先に指導計画を立ててきた。

T児は、日本育ち日本生まれであり、幼稚園も小学校も日本人同様に通ってきたが、入学当初から通常学級での学習についていくことが困難な場面が多く見られていた。家庭内の言語環境が影響していると思われたので、教科指導の中で学習言語はもちろん、発言や質問の「話型」をつくり、「話型」を常に意識させ指導を続けてきた。そのような指導が効果的だったのか、問題文や発問の言葉を意識することができ、問題を読解する力がついてきたように思われる。

当初 M児に関しては5年生の学習もほとんど実施していなかったため、6年生の算数を日本語指導教室で実施して大丈夫だろうかと不安であった。5年までの学習内容がしっかり定着していたわけではないが、かけ算九九をおぼえていないために足踏みしている様子が見られた。全てをおぼえなくてもかけ算の表を見ながら問題を解くことを繰り返すことによって、問題が解ける喜びを積み重ね自信をつけていったようだ。

2人の児童には、算数ドリルやテストに振り仮名を振り、分からない語句は辞書で調べたことも行ってきた。ルビ振りは日本語サポーターが行い、児童の漢字の習得具合に応じて、すでに読めるものは振らないなどの調節をした。日本語サポーターは児童がどのような言葉や語句に躓いているのかを個別にチェックし、後の指導に生かせるようにした。また、授業で出てくる教科特有の言葉を意識させ、リライトし覚えるよう繰り返し学習させた。パターン化した問題を繰り返し解かせたり、まとめのテストの問題傾向を分析し似たような問題を事前に何度も解かせたりした。日本語教室で学習した際に出てきた漢字や語句は全て漢字練習ノートに書き込み、宿題にした。タイムリーな漢字や語句なので覚えも早くなってきた。「今練習している漢字や語句は今日や明日の授業に必要」といった自覚が芽生え、児童の中で、日々の学習が意味あるものになっていったのだと思う。

【3年児童について】

4人の中には、十分に在籍学級で学習についていける児童が含まれていた。あえて、全て取り出したのは4人の中での学び合いの機会を作りたかったからである。それほど能力の差が極端になかったからだが、学習をする中で互いの考え方を知り、児童同士のかかわりの中で考えに深みが出たり発見があったりといった場面が多く見られた。

「かさ」の授業においては、言葉による説明だけでなく具体的にジュースを用いたり、ペットボトルの飲み物を操作させたりするなど、視覚だけでなく五感全てに訴えかける授業を展開してきた。また、四則演算の学習では、日本語表現として量が増える言葉のひとつひとつにこだわり、どの言葉を使用したときに量の増減を示すのか理解させていった。この様に日本語の表現にこだわることにより、児童が文中の言葉に着目するようになった。こうした児童への支援を工夫することで、日本語の持つ感覚、似た言葉の微妙な意味の違いについて子ども達もこだわるようになり私自身も多くの発見があった。

比較的、能力の高い学年だったが、このような個別の支援を工夫した学習を進めていく中で一斉指導では取りこぼされてしまいそうな、抽象的な日本語表現や語句に躓いていることが分かり、外国人児童の取り出し指導、個別指導の必要性を強く感じた。

IV 課題

(1) 在籍学級の担任との連携

効果的な授業を計画するとき、在籍学級の担任との綿密な打合せが必要である。時間をかけ、授業の細かい部分まで相談することで、効果的な指導ができる。しかし、打ち合わせの時間がなかなか取れなかった。対象児童の課題は多様であり、支援の手段も個別に違う。担任との打ち合わせ時間を確保することが今後の課題である。

(2) JSL 対象児童の学習習慣の確立について

児童の学習理解を促進させるためには、繰り返しの学習が必要である。計算問題や文字・用語などを覚えるのは、繰り返し学習(漢字練習・計算ドリル等)で身につけることができる。

しかし、日常生活では体験する事が少ない事柄の定着は難しい。意図的に場面を設定する必要があるが、授業中に組み込むには担任との打合せや事前準備に時間がかかるため難しい。家庭学習を自主的にできるように「自分で学ぶ手段」を指導していかなくてはならない。

本校は、小中一貫教育を推進している。中学1年になった時、「自分で学ぶ手段」がどれだけ身に付いているかでJSL児童の学力の向上は左右される。中学校の学習にスムーズに移行できるように、中学校との連携も重要だと考える。中学校での学びにつながるよう意識しながら学習指導を進めていかなくてはならない。

(3) 保護者との連携について

保護者の持つ教育観の違いから、家庭における児童の学習環境が不安定な児童が多く存在している。「今後子供たちが生きていくために必要な思考を身につけるためには教育が必要である」という事を理解してもらうためにも、今後も保護者との連携を図ることは重要であると考える。

(4) 進路について

JSL 対象児童の進路については、小学校から中学校への進路だけでなく、高校進学をも見据えた指導の必要性を強く感じている。保護者には高校進学意識のない場合もあり、保護者の意識改革も必要である。高校や大学進学だけが進路ではないが、指導者の私たちは子ども達の将来の選択肢を少しでも広げること、様々な進路が考えられる情報を提供することも必要であるとする。→ 進路ガイダンス(小中・中高)・キャリア教育

(5) 学習教材の蓄積について

JSL カリキュラムで作成してきた教材については、特別支援学級や特別支援教室の担当と共有したり、通常学級の指導に取り入れたりするなど、日本語教室にとどまらず発信していけるようにしたい。

(6) JSL を取り組むにあたっての環境や指導体制の確立

今年度は、3学年の算数・6学年の国語算数において、時間割をそろえていただいたため指導が大変効果的かつスムーズに進めることができた。対象児童が多学年にわたるため全ての学年をそろえることは、出授業、少人数指導、特別教室使用等の関係から難しい。「全取り」ができない児童への効果的な教科指導の方法や、日本語教室に指導に入っていたいている講師やサポーターの役割を考えていかなくてはならない。

V 終わりに

視察させていただいた実践校の一つは、在籍学級に日本語指導教員が入り込み「在籍学級でのJSL国語」を指導していた。その際に座席に工夫があった。JSL 対象児童の周辺に配慮を要する日本人児童を配置していた。JSL 児童のために作成した、分かりやすいワークシートで外国人も日本人も日本語指導教員が指導に当たっていた。

JSL は、より具体的に、より児童の側に立った教科指導のあり方の一つで、オーダーメイドの指導といえる。したがって、外国人児童対象のみに効果があるのではなく、全ての児童を対象としていると考える。そのため、JSL カリキュラムの視点に立った授業は、在籍学級の他の児童にとっても理解しやすく、また興味を持って取り組みやすい内容となっていると思う。

今後、JSL カリキュラムを在籍学級において日本語指導担当者が入り込みを実施したり、担任がJSL カリキュラムの視点に立った指導を行ったりできるように研究を進めていきたいと考えている。